

日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 日本産業衛生学会東海地方会

〒470 - 11

愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1-98

藤田学園保健衛生大学医学部公衆衛生

学教室内 電話 (0562) 93 - 2453

発行責任者 島 正吾

(題字 皿井 進筆)



瀬戸の古陶器
鴛鴦(おしどり)
の水滴は、瀬戸
古窯址から出土
した鎌倉期の逸
品であり、小品
ながら独特の風
格とたくまぬユ
ーモラスな造形
は、いつも好事
家の垂涎的とな
っている。
山元正義 所蔵
(瀬戸健康管理
センター)

謹 賀 新 年

日本産業衛生学会東海地方会長 島 正 吾



新年あけましておめでとうございます。

日本産業衛生学会の会員並びにご関係の皆様には、本年もますますご健勝で、この一年が希望に満ちた年となりますよう心からお祈り申し上げます。

昨年度には、私達は全く思いもかけず当地方会の至宝ともいふべき、宮田昭吾先生、横山恒矢先生そして大谷誠二先生を相次いで

失い、ここに新年を迎えるにあたってご霊位のご冥福を祈り、産業衛生活動にかけられた先生方の高邁なお志を継承すべく、誠に身内が引き締まる思いがいたします。

さて今日、私達の産衛地方会活動の基盤となる東海四県下の適用事業所数は約41万(うち製造業9.8万)を数え、またそこに登録されている産業医の先生方の数は、実に10,171名(専属201名、非専属9,070名)にのぼっております。

最近の労働衛生事情を勘案するとき、産業現場には未知の原材料が

氾濫し、生産工程や労働態様もまたこれまでとは次元の異なる複雑な様相を呈してきております。そうした中で働く人の健康問題は、旧来の労働災害や急性中毒が影をひそめ、代って労働力の高齢化に伴って、いわゆる成人病・老人病などの慢性変性疾患が増加し、また未知の有害物質の長期微量暴露による慢性中毒、アレルギー障害、発癌や催奇性の問題などが急速に台頭しつつあります。これらの課題への対処には、従来の集団としての包括的管理から、むしろ従業員一人一人に焦点をあてた、よりきめの細かい健康管理的工夫が期待されております。

それからまた、最近のアスベスト問題に見るように、今日の産業衛生問題の多くは、その原点である産業の場から広く地域社会や家庭生活のなかにまで、その影響を拡大していく傾向があることを看過してはなりません。

そして今、私達は何をすべきか。それには私達東海地方会の会員が、現在東海四県下で活躍されている沢山の先生方と一緒に切磋琢磨して、働く人々の健康を確かに守るために、惜しみなくマンパワーを爆発させていくべきことではないでしょうか。

特集

東海の産業の歩みと21世紀への展望

——労働衛生はどう変わるか——

東海地方会は、昭和11年に発足して以来、半世紀の星霜を経た。この間わが国は第2次世界大戦、敗戦、戦後復興、高度経済成長から対外経済摩擦の時代へと続く未曾有の激動を経験した。産業構造、生産技術、労働態様の変化は著しく、就業者数の産業別割合でみると、第1次産業は44%(昭15)から9%(昭59)、第2次産業は26%から34%、第3次産業は29%から57%と一変している。このような労働現場の変貌に対応して労働衛生の場でも結核、中毒、中小企業問題、疲労性疾病、VDTなどと次々に新しい問題が現われ、それへの対応に追われてきた。

いま、時代は21世紀に向けていよいよその歩みを速めつつある。これからの労働衛生の課題は何か、どのような取り組みが必要となるのか。本特集では、歴史を振り返る中から、将来を共に考えてみたい。

(編集部)

——鉄鋼業——

小篠 築 (大同特殊鋼知多診療所)



国づくりの基幹産業として君臨してきた鉄鋼業も石油ショック等幾多の試練を乗り越えて今日まで栄えてきたが、長引く円高不況と後進国からの追い上げで、未曾有の苦境に陥り、今後の見通しははなはだ暗い。

東海地区の鉄鋼業は、鉄鋼連盟加盟事業所として高炉の新日鉄名古屋(東海市)を始め、製鋼事業所の大同特殊鋼(知多・星崎・築地)、愛知製鋼(知多・刈谷)、川崎製鉄(知多)、トビー工業(豊橋)、中部鋼板、日本金属(衣浦)があり、特殊事業所として大同鋼機、日立金属(桑名)、矢作製鉄等がある。

鉄鋼業の労働は扱うものが高熱の金属のため、代表的な高熱重筋作業として熱中症の発生を始め、高炉のCO中毒、製鉄・製鋼過程での粉じん発生によるじん肺、鋼塊処理・圧延・整備(研削等)等の過程での金属の接触、落下騒音による難聴、鍛造・鑄造の騒音、振動、粉じん等種々の職業病の発生をみてきた。その作業のきつさから「マンコ口病」つまり定年満期退職して万の退職金をもらおうと間もなく、コロナと死ぬが発生した。炉前作業・圧延作業等では、重量物を扱い、高熱物体にさらされるので、発汗を調査した記録では一日10ℓ 発汗をみている。夏季は特に大変な作業となり、食塩や水の支給といった夏季対策が重要課題であった。

ここ10年、20年の鉄鋼業の技術革新は目ざましいものがあり、新設備の導入により、従来経験と勘に頼っていた作業から、コンピューターを取り入れた科学的管理となり、設備の大型化、機械化、高速化が促進され、作業環境が著しく整備され、冷房の普及と共に熱中症もみられなくなった。粉じんも一部を除いて著しく減少したが、騒音だけは未解決の部分である。

肉作業が軽減して、高能率、高生産性になったのはよいが、定年の延長、新入社員の減少等による平均年齢の高齢化に伴って、いわゆる“成人病”人口の増大をみている。職業病の対策よりも、高齢者の職場配置、成人保健が重要課題となり、更には、平均余命の延長に伴う定年後の余生“生きがい”“幸せづくり”のために労働衛生も深くかわり、力を入れなければならない。

——化学工業——

石川 昭 (三菱化成四日市工場)



—— 21世紀の化学工業の

態様に備えて、我々産業医は ——

21世紀には、化学工業はどのような産業として変化しているであろうか、また人類の生活、発展、福祉のためにどのように貢献しているであろうか等を考える事は、まことに困難なことではある。しかし、ある程度の予測に対して現時点での我々の対処の仕方を少々考えて見たいと思う。

50年後の予測では、化学工業の呼称はなくなっており、素材供給面では他産業と融合し、素材供給産業としての主力の一翼を荷なっているのではないかと。又、社会福祉、健康面への展開としては発展が予測されるシルバー産業で中心的役割を示すとともに、食品関係でバイオテクノロジーを活かし、食品会社に変身しているのではないかとみる意見もある。

何れにしても、これからの化学工業は、既存の素材を中心とした安定供給の堅持、新素材、バイオを中心とした先端技術関連材料の開発と供給、さらに一歩踏み込んだ末端製品への参入、その3つの役割によって次第に他産業との明確な境界がなくなり、より広域且つ複合化産業になってゆくであろうとの見方が強い。

例えば、化学工業は、半導体製造に大きな役割を果たしているが、単に材料提供者にとどまらず、半導体製造まで進出すべきであり、同様にあらゆる分野で最終製品に近付ける努力をするべきであるとの意見もある。

既存の素材の複合、誘導等によって新規化学物質等も出現して来る可能性はあるわけで、今後、産業医としてはこれらのチェックを厳重に行わなければならない。環境管理、作業管理の面ではこの時期には立派な成果が上がっているものとすれば、労働者にとっては、微量曝露の時代であるため、Accidentに伴う災害、急性中毒以外には、遺伝的影響等に目を向けてゆかねばならないであろう。そのためにも、現在の健康診断で知りうるすべての詳細な事実(その労働者の生活環境、作業環境、作業方法、作業時間等)を記録して後継者に伝えなければならない。化学工業の発展に伴って、遺伝子工学、バイオ等がこれに役立ってゆくのではないだろうか。

もう一つ化学工業の力ではどうにもならないのが、精神神経出力的な障害である。現在メンタルヘルス対策が労働省より推進されているが、これも今後真剣に取り組んでゆかねばならない課題であろう。

——電機産業——

鈴木 良一 (東芝名古屋)



我国は、戦後驚異的な復興をとげ、現在世界最大の経済大国となったが、電機産業は電力、重化学工業などと共に、その実現に多大の役割を果たして来た。特に30年代からの高度成長期に各種の家電製品が大量に生産され、飛躍的に普及した事は記憶に新しいし、他方、原子力発電その他の発電用機器や医用機器、半導体等の急速な伸長も目をみはる程である。労働衛生も、戦後の産業結核や伝染病対策の時代から重金属、有機溶剤その他の有害化学物質による中毒の予防へと進展し、次いで頸肩腕障害等の職業病の予防や、高齢化に伴う成人病予防、更には積極的な健康づくり、メンタルヘルスへと、産業の変貌に追随する形で発展して来た。

扱て、間近に迫った21世紀は高度情報化社会として、家庭でのINS端末機、テレビ電話、ファクシミリと普及、学校でのパソコン教育の一般化、光通信、人工頭脳等の情報通信、電子工学の進歩、新素材による燃料電池など新しいエネルギーの開発、更には世界人口の増加に伴う家電製品の需要増などが見られる事が予想され、これらハイテクの荷ない手としての電機産業は、引き続き新しい時代の花形として期待通りの躍進をとげる事であろう。そこで、この業界の労働衛生はどんな変貌をとげる事であろうか。

- 1) 高齢化 老齢化率は一層進み、2010年には19.5%となり、先進国の中で最も高くなる。従って現在より更に健康志向が強まり、個人毎のきめ細かな保健指導にシステム化された方式などが普及するだろう。
- 2) 作業形態 OA化、FA化が更に進み、現場作業者の比率が下るだろう。また通信ネットワークが出来れば、職種によっては在宅勤務が増加し、作業形態の多様化がもたらされよう。更に海外からの専門技術者の雇用も漸次増加し、職場の人間関係にも変化が生じ、健康管理も多様な対応を迫られるだろう。
- 3) メンタルヘルス 知識集約産業であるため、ストレス要因が増大する可能性が強く、最も大きな労働衛生上の問題となるのではあるまいか。また一人当たりの労働時間が短縮され、従業員の生活が従来の働き蜂型から、ある程度レジャー型に移行する時代となり、ハイテク時代だけに自然との対話など、余暇時間の上手な活用法の指導や、個人の志向やニーズを尊重した健康管理手法の開発などにより、強制型でない本来の姿のメンタルヘルスと健康増進が実現されるだろうと予測したい。

——自動車産業——

入谷 辰男 (トヨタ自動車)

現在の労働衛生は環境管理、健康管理、作業管理の3本柱で説明されることが多いので、この3面から今後の課題を述べてみる。



〔環境管理面〕物理化学的環境面では騒音対策、新規物質問題を除いては殆んど対策がうたれ、問題は少ないと考えられる。

〔作業管理面〕総論として高齢化に伴う職務再設計の問題がある。これを解決するには腰部負担、上肢負担、下肢負担、視覚負担、精神負担など、医学、人間工学を中心に評価、改善して

ゆかねばならないであろう。

〔健康管理面〕海外駐在員の健康管理と精神衛生管理の問題がある。前者はアフリカ、中近東、東南アジア、南アメリカなどの感染症や飲料水を含めた生活用水の対策や異国での精神健康問題がある。

後者の精神衛生管理は、mental health care leaderの各企業内での活動——活性化のための施策を整理して推進して行く問題がある。

何れにしても物理化学的環境中心の職業病管理から作業管理へ移行し、衛生工学よりも人間工学の関与する部分が多くなる。

中高年対策も昭和50年頃より提唱されているが、中年からの健康管理、高年の職務再設計問題は今まで進めてきた環境管理と同様に理論的に評価し、問題点に対して対策を進める手法が開発されなければならない。最近、Mental healthの問題で、阪大の三隅教授のPM型リーダーシップ論を聞く機会があったが、このうちのMaintenance(集団維持能力)をつかさどる学問として労働衛生をとらえる必要がある。このMaintenanceには上肢や下肢の運動機能、眼を中心とした感覚機能や精神機能を統括する機能年齢的発想により個人や作業を見直してみることも一つの方法である。

更に、個人の身体機能を低下させる疾病の予防に関して、あらゆる分野の医学を導入して行かねばならないであろう。

そこには、疾病予防活動や健康づくり運動を中心としたhealth serviceと医療やrehabilitationを中心としたmedical serviceとの連携も必要となり、労働者集団の健康保持のための幅広い学問として成長してゆくことを期待している。

——窯業——

加藤 竹男 (ノリタケカンパニー)



名古屋から瀬戸に向くと、「土と炎の街瀬戸」と書かれた立柱がある。窯業と言えば土と炎が連想されるが、現在、材料は鉱物に限らず、金属、合成物質などに広げられ、焼成はまだ高温焼成が主流であるが、省力化で作業者は高熱の場所には殆んど立ち寄らない。

産業医学ジャーナル60年1月号に「窯業における健康管理」を書いた。工程と労働衛生上の問題点を表示した。(以下図式と略す)

21世紀まで13年、予測も技術革新が益々急速化する今日、視野の狭い筆者にはでき難い。短文でもあるので、なにを夢みているかもお分りにくいと思うが、ご容赦賜りたい。

21世紀でも図式に書いた工程は、まだ国内で行われていよう。ただし多品種少量生産でも、総量として相当の生産高がある工場の工程は今世紀大幅に変化しよう。原料は袋詰めにして工場へ搬入されよう。いくらかの調合工程は残すが、殆んどは調合されたものである。少な

くとも成型までは自動化され、集中管理で無人とも言える工場を流れよう。陶磁器などの美術品は別として、徹底した省力化の設備投資をするか、国外で安い労働力の活用かの選択を10年以内に迫られている。87年現在でも以前の10分の1以下の省力技術を持ち、湿式工程は乾式成型が可能になりつつある。ファインセラは材料の高純度、高微粉砕が可能になり、更に物質の性能の研究開発が加わって汎用性を高めた。勿論新しい健康被害の看視を必要とするが、その技術は在来の窯業の製造には多くの改革の指針となろう。

前述のように高熱ばく露は少なくなったが、焼成のエネルギー源の変化は進むであろう。低周波、低温化され、常温に近い条件で焼結可能な材料が開発される。不可能でも、炎は人体とは隔離されている。じん肺の新規発生は心配ないとしても、有所見者の看視は必要であり、現在凶式で指摘した有害物は省力化で解消されたとしても、新材料による健康看視は21世紀初めはまだ残ろう。

問題は材料を袋詰にする窯業原料企業や、まだ残る可能性のある零細企業であろう。20年位でその業種が健康被害を生じさせない設備投資などが可能かということである。悲観的である。職業病輸出と言われるのが海外生産に頼る？。国際交流が一層エスカレートする21世紀には国内外を問わず、安全衛生対策の健康投資は厳しく求められよう。また単に現在の窯業原料でなく、例えば陶磁器、玩具なども金属、プラスチック、ファインセラなど新材料が主流になると予測され、企業の活動範囲が広がると思う。生存競争に生き抜く経営で躍進の道はあると思う。40年、窯業の一分野の企業の産業医であった筆者には、少なくとも苦しんで来た問題だけは解決された21世紀を夢見たい。

—— 金 融 業 ——

飯 田 英 男 (東海銀行本店)



『彼のデスクにはミニコンピュータやテレビ、キーボードがあるだけで整然としている。机の前にあるパネルのランプが点滅している。取引先のA夫人からのコールのようである。彼がテレビのスイッチを入れると、画面にA夫人が映し出された。A夫人の息子の留学のことで彼に相談をもちかけていたが、今日はその結論を出す日であった。『やはりロスアンゼルス大学へ行かせることにします。手続きをとって下さい。』彼はテレビ画面にアメリカの大学リストを映し出し、A夫人の指定したロスアンゼルス大学にライトペンを当てた。すると、リアルタイムでA夫人の預金口座から入学金が引き落され、宇宙衛星を通してアメリカの大学の口座に振り替えられる。そして数分後に入学許可証がA夫人のプリンターに出てくるのである。』

これは、昭和58年の社内報にのせられた「21世紀への旅立ち」というSFミニ小説の中の一部である。21世紀といっても、あと十数年後にやってくるわけで、もう現実的な重みをもっている。東海銀行では、昭和40年代に第1次オンラインシステムを構築し、昭和51年には第2次オンラインシステムが稼働しはじめた。そして現在、第3次オンラインシステムの開発作業が進行している。各金融機関において第3次オンラインシステムを開発中であるが、その重点の一つとして、ホームバンキング(HB)とファームバンキング(FB)がある。最初のSF小説はHBとFBを結びつけた将来像を描いている。この時代の

労働態様はどのようなものになるだろうか。おそらく完全週休2日制が金融界にも定着するであろう。その代り営業時間の延長が生じて、従業員は時差勤務制～交替勤務制となるかも知れない。銀行のエレクトロニックバンキング化に伴って、コンピュータ端末装置が増え、VDT作業が更に増加しよう。従業員の少数精鋭化が求められるので、労働時間短縮の中で労働密度の高まりが予想される。営業活動を中心とする支店と、今までの支店の二線・三線業務を集中処理する事務センター(地区センター)の分離が一層進行しそうである。

こうした中での労働衛生は、現在より複雑化し、多様化して行きそうである。仕事による労働負担は、眼・手腕系・精神神経系に主としてかかるので、これらの疲労→過労→疾病を防ぐ対策が要求される。一方、中高年労働者の増加で、成人病や悪性腫瘍対策も一層比重を増してゆくことが想定される。CT検査や超音波エコー検査など画像診断が、もっと簡便化して健康診断にとり入れられるかも知れない。腫瘍マーカーによる早期診断法も進歩して、スクリーニング健康診断の技法が確立してゆきそうである。

何より比重が高まるのは、メンタルヘルス或いは心身医学的側面で、健康相談・保健指導等へのニーズが大きくなってゆくことであろう。

~~~~~

—— 通 信 業 ——

伊 藤 怜 子 (NTT名古屋中央健康管理所)



その時代を変革する技術群は、人類に狩猟、農業、工業、そして現代の情報社会の歴史を営ませてきた。1985年はニューメディア元年と呼ばれ、従来のTV放送、商用電話等アナログ技術によるメディアから通信の空間、時間を超越する手段として最新のデジタル技術を駆使したニューメディア(多彩な、しかも人間が把握しやすい映像の形で提供される情報交換の様式)が登場した。

今後の主軸は通信系(INSに代表される)とパッケージ系(ICカードに代表される)の2種類であるが、INS(Information Network System)は、従来の電話、ファクシミリ、データ通信、DDXとそれぞれ独立していた通信網を一つにまとめ、あらゆる情報の伝送、処理、蓄積を低コストで提供する総合通信システムであり、1990年に実用化された際には、社会に大きなインパクトを与えることになる。私共の側でも画像通信媒体の提供によってテレカンファランス、卒後教育、在宅ケア、コンピュータによる診療支援、個人データの生涯蓄積も可能な健康管理システム等の飛躍的な発展等の光も期待されよう。

一方、影としてまっすぐ直面するのは、21世紀の超高齢化社会にあって労働力人口の半数以上が45才以上の中、高齢者が占められ、60才以上高年労働力が15%近くにもなる社会である。

情報化社会にあって技術が人を離れて一人歩きをし、そのもたらすサービスが利益第一主義に基づく生産性向上に重点がおかれるならば、ありあまるものを生産してそれを売り込むために忙しく働き、そしてそれをまた忙しく使い捨てるライフスタイルを維持するために老骨にムチを打ち、老眼をしょぼつかせて、情報洪水の中に沈む人々も多くなることであろう。

筆者もまた、今後のニューメディアの光と影に関心を持ち、21世紀にまで足を踏み込むことが出来るならば、INSによる卒後研修の画

像通信サービスでも受けて化石人類と呼ばれないよう心がけたいもので、そのために1987年を元年にしたいと願う。

## —— 中小企業 ——

齋藤 俊 二 (東海検診センター)



中小企業の労働衛生の未来について果してどう変わるかと問われれば、残念ながら、それは変わりようがないと答えざるを得ない。昭和53年の地方会学会で「中小企業の労働衛生をどうするか」というパネルの一員として発表した際、会員の方から批判やら励ましなどをいただいた記憶があるが、その後一向に進んでいないのが

実情であり、この傾向は今後も続くであろう。かくして大企業の労働衛生のレベルが向上して行くのに対し、中小零細企業のそれは旧態の依然のままで、その格差は拡大し、二極化現象が進みつつあるといえる。しかし、新春早々悲観的発想のみでは能がない。ここで、もう少し明るい展望を試みて見たい。私共の機関の所属する全国組織として通称「全衛連」なるものがあり、中小企業の労働衛生推進には欠くべからざる役割を担っているものと自認しているが、そのリーダーの方々は、ほとんどが一流企業の一流の産業医としてのキャリアを活かして、転じて中小企業の労働衛生の向上に尽力されている方達である。この方達のサポートで、大企業との格差を縮めるのは無理としても、せめて格差を狭げないよう追いついて行くことが私共の任務なのかも知れない。つまり、二極化をあくまで阻止し、パラレル化を図るべきであろう。一つの例として、現在全衛連は特殊健診のレベルアップを提言しつつある。鉛における原子吸光法、有機溶剤におけるガスクロ等、技術の進歩、機器の普及は以前とは比較にならないほど情報処理能力が高くなっており、健康診断内容も格段の飛躍が行われなければならない。私が東北の一鉱山で、はじめて産業医らしき職務についたのが昭和30年。鉛の測定といえば、熟練と根気を要するジチゾン分析法に頼るしかなかった。それから30年、現在数々の便利な機器が出現したが、21世紀は更に高度の技術が開発されるだろうと信じる。大企業でとり入れられた技術や健康管理體系が、中小企業に根を下すには時間がかかるかも知れないが、やがては逐次実現されるものと期待したい。

## 「昭和61年度東海地方学会」を振り返って

昭和61年度当地方学会は去る11月29日(日)に岐阜大学医学部講堂において開催された。今回の学会は地方会設立50周年記念会をあわせて行ったので、その記念としての特別講演と特別報告を各1題設定するとともに学会終了後に記念懇親会が行われた。学会への参加者数は111名、懇親会への参加者数は68名であった。本学会を中心になって準備されながら学会直前に急逝された宮田教授の遺影が演壇の脇に祭られていたが、その遺影に見守られて当初の目標どおり成功裏に終了したことは喜ばしい。以下に特別講演、特別報告、一般演題の内容について、所感を述べたい。

(1) 特別講演 中央労働災害防止協会労働衛生検査センター所長の館



正知先生(前岐阜大学教授(が「最近の労働衛生の事情」というテーマで講演された。先生は労働衛生学の実践活動を全国的視野で指導されている立場から、約1時間半に

わたって現状における問題点と今後の方向を提示された。中小企業とりわけ小零細企業の労働衛生は、まだ解決されていないことから説きおこし、国内における中高年労働者の問題、業務上疾病等の労働衛生上の多面的な問題をとりあげられた。また、WHOやILOの考え方にもふれられた。今後の労働衛生活動の基本的な視点を私共に与えて下さった。

(2) 特別報告 名古屋大学名誉教授の井上俊先生により「50周年記念誌編集をおえて」というテーマで報告が約1時間にわたり行われた。先生は50周年記念誌の編集委員長として多大な努力を積み重ね、遂に発刊に漕ぎつけられた。先生の話でとくに注意を惹いたのが、東海地方で産業衛生学がいかなる機運の中で発祥したかについて説き起された点であろう。労働衛生学に関して東海地方の諸問題と世界における産業発展や日本国における社会情勢との関連の中で明らかにすることは、一層興味深いものがある。東海地方における産業衛生学の今後の発展を期する上でも、過去の流れは大いに参考になるであろう。

(3) 一般演題 午前9時から昼の休憩1時間をはさんで午後2時過ぎまで、25題の演題発表と討論が一つの会場で行われた。

今回の報告テーマの内訳は、石綿粉塵と健康障害、VDT労働、鉛中毒が各3題、慢性バリリウム肺、振動障害、しそ栽培者の皮膚障害、サラリーマンの健康と寿命、じん肺が各2題の他、TDIによる健康障害、シンナー中毒による小脳萎縮、ジルコニウムや塩化白金酸の生体影響、潜函作業者の骨萎縮、個人騒音曝露計が各1題であった。

各演題を聴いた特徴点として、①近年の産業の変遷と発展に伴う健康障害(VDT、しそ栽培等)、②従来、広く使われてきた物質による社会衛生上の問題提起(石綿等)、③長年の集積資料の観察分析により、労働者の健康問題を明らかにしたもの(サラリーマンの健康と寿命等)、④血清免疫学的アプローチ(窒業じん肺、白金化合物等)、他が挙げられよう。

学会終了後、地方会総務部長である森川先生の司会による50周年記念懇親会(岐阜会館)は盛況であった。島地方会長、皿井前地方会長の挨拶につづいて、各県を代表して吉川教授(岐阜)、吉田教授(三重)、清水先生(静岡)、竹内教授(愛知)がそれぞれ今後の学会活動について決意表明を行った。なごやかな雰囲気の中で美味とアルコールもあり、話がはずみ、しばし時を忘れた。

最後に、今回の学会を準備してこられた、岐阜大学を始めとする岐阜県の学会員の皆様にご心から感謝します。

松本 忠雄 (名市大公衆衛生)



## 話題

## M—5 事業計画と環境アセスメント

近年、大規模な海上埋立事業が、マスコミに屢々登場するようになった。最も広く知られているものは、関西国際空港で、面積1230ヘクタールの人工島を陸岸から5km離れた海上に建設しよう、というものである。

又、中部国際空港も略同規模の人工島を伊勢湾内に建設しよう、とするもので今後も地元新聞紙上を賑わすことと思われる。

ここで、とり上げたM—5事業計画とは、名古屋港南五区埋立事業計画の略称であり、規模はやや小さいながら、最終埋立面積320ヘクタール、第1次埋立面積110ヘクタールの人工島を、知多半島新舞子沖約400mの地点に建設するものである。(1図参照)

M—5計画は昭和50年頃から愛知県と地元産業界が協力して進めて来ており、既に、昭和56年度から水深測定等の基本調査を開始し、昭和63年度には工事の着工を目指している。

まず、構想であるが、第1次計画110ヘクタールの内、55ヘクタールは長い人工砂浜を特長とする海浜公園を建設して、県民の憩いの場とする予定であり、30ヘクタールは県内の都市ガスの供給源となるLNG基地を建設することになっている。

さらに、LNGをガス化する際の冷却能力を利用して行う冷熱工業用地として22ヘクタールを予定している。(2図参照)

人工島の埋立用材として (1図) ランドサットで撮影した伊勢湾は、伊勢湾内の海底を浚渫した土砂とともに、尾張地域から発生する無害な産業廃棄物を当てることになっている。この人工島に渡る橋は2本で南の橋は海浜公園に遊ぶ人が歩いて渡るもので北側の橋は自動車専用橋である。

本事業を着手するためには、この建設が周辺に悪い



(2図) M—5完成予想図

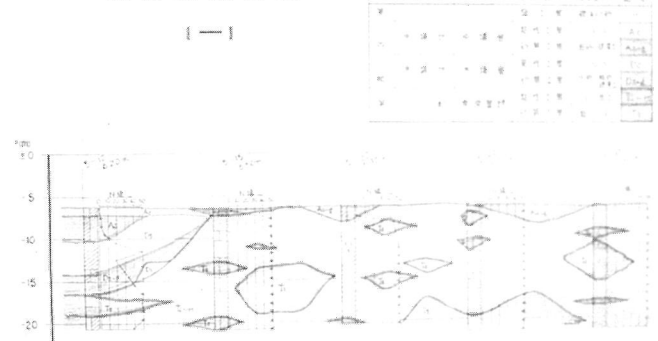


影響を与えたりすることはないか等、いわゆる環境アセスメントが必要であり、既に約10億円を投入して諸調査を行っているので、次にその一端を紹介する。

松本 清 (三菱重工名古屋支社 顧問  
名古屋港南五区埋立事業推進事務局長)

まず、海底の地質調査であるが、約100個所の地点を選んで、槽を立て、海底をボーリングして土質を調査するものでその結果は下図(3図)のようで、塊状にみえる砂礫が粘土の間に詰まっている非常に安定した地盤で、常滑累層と呼ばれるものであった。なお、文献によれば名古屋港は殆ど沖積層で常滑累層が露出しているのはこの海域のみとのことである。(3図) 地層想定断面

地層想定断面



次は海流の調査であるが、これは流速を自動測定する流速計設置による方法(4図参照)と、目標物を流して行う標流桿調査による方法を併用した。

(4図) 流速測定ロボット

その結果、伊勢湾の主な潮流は知多半島の西岸に沿って流れ、湾口で最も強く、3ノットに達することもあり渦も発生することが確認された。



この様な流況下で人工島の建設がどのような影響を周辺に与えるかの調査は下図(5図)のように行った。大型の実験用プールの中に10m四方位の人工島の輪郭を作り、波浪を起して測定を行うもので、砂浜に与える影響調査のため、普通の砂粒の百分の一の寸法の砂も配置されている。実験結果では、人工砂浜の砂の流出も無く、波浪の悪影響も少く、人工島と陸岸の間の海水の交換も充分対策を樹てれば良好とのことであった。

その他、水質、魚類、景観等多くの項目の調査を行ったが記述を省略する。計画通り進めば、昭和60年代の後半には新島出現となる予定である。

(5図) 人工波浪によるモデル実験




# 新春随想

## 1987年の初めに思う

上野 清敏 (瀬戸健康管理センター)

### (1) 感謝



いつも思うのであるが、衛生学の実務に長く従事させていただけた幸福は、たとえようもなく有難く感謝している。成書によると、ギリシャ時代「ヒポクラテス」が医学、衛生学を講じたとあるが、この健康増進学の流れは、滔々として二千年余現在に及んでも貢献しており、今やその必要性が更に要請されていると思うのである。

### (2) 労働衛生対策

我々の従事している労働衛生の分野は広い。職業病の防止が、その中心だ、と教えられてきたが、そうとも限らないとも聞く。これを明らかにして、又その対策をとってこられた先人の労苦に、深い尊敬の念をいだくものである。たとえば「ラマッチニ」「ベッテンコウヘル」等である。しかし古典的職業病の回顧に陶醉してはいけない。世もうつり、今やこれを防ぐ仕組みは、なんとか出来ているのである。見よたとえば法規、事業場の衛生管理者、工学の衛生管理者、作業主任者、産業医、コンサルタント、作業環境測定士等々目を見張るのである。しかし、この枠も、寂として声のない面もあり、衛生統計でも依然として労働災害の多いのに驚くのである。

### (3) 科学と愛

産業医学、労働衛生は、科学であり技術であると考え、業務遂行の理解はしやすい。しかし、科学が生活に学問に無限に貢献すると考えられながら、倫理の問題との接点から、やはり限界があるのではないか。筆者の直面している環境問題でも、遂行中に虚無感の出でくる悲しさを、しばしば味わっている。これは「愛」の心を科学に加える大切さを、忘れていないからではないか。外面的な科学の無味にこもらず、内面を重んじる哲学面にも知恵を借りるということである。「もし愛なくば鳴る「かね」となりしなり」「われすべての奥義と学識に達したりといえども(云々)もし愛なくば、われは無なり」(コリント前書13章) このパウロの説くところは、科学の領域で、われらのあるべき心がまえを示しているのではなからうか。又、「愛は永く忍ぶなり人の善をはかるなり、おのれの利を求めざるなり、真理を喜ぶなり」とも加えている。

### (4) むすび

かくて、われらの労働衛生、環境衛生にも、愛が加わることで更に花咲き、実のり、熟して収穫ができるのでないか。かかる年に仕上げていきたいと年の初めに思うものである。

## 新春随想

平井 智 (日立金属桑名工場)

今年は兎年。兎年生れの私にとっては還暦の年である。臨床の場より産業の場に入り今年4月で丁度31年になる。この間色々と学問的に又人生哲学的体験もして来た。昭和58年に社長より理事に任命されたが、もう数年はこの任から解放されそうにもない。経済摩擦と円高で加

速された不況は日毎に強くなり産業構造の転換という難問題に現在日本の製造業は直面している。私が選任されている産業医の2工場又関連会社数社も同じ運命の中で四苦八苦している。



私はこのような時期にあたり考えたい事もあり昨秋休暇をとり一人で比叡山に登り延暦寺附近を散策し最後に根本中堂を拝観した。長い廻廊を渡り階段を登り高い拝壇から見下すように拝むと二階位の高さから拝壇の真下は薄暗く石畳で俗世界を隔絶し静寂さがひしひしと身に感じられた。

その中に常住不断の三つの燈がともし薬師如来の像が安置されていた。眼を静かに閉じる。修業僧が燈をかかげ辺りの闇を照らしながら御堂の中を行く姿が見えるようである。

“一隅を照らす者はこれ国宝なり”という伝教大師の言葉が身にひしひしと感じられ身も心も暫く清らかな心境のひと時を過すことが出来た。人間は財力とか地位とか名誉とか外物に照らされて光ろうとするが、一度時世が変ればお先真暗になる。自分で自らを修め努力すれば自らの居る一隅を照らす者になる事を念ずべしと教えられた機会が過去にあったことを思出した。もう一つ新春に際し心がけたいことがあった。ゴルフをされる大半の人はホールアウトすると次のコースへと急ぐ。ゴルファーとして当然のエチケットである。しかし私は昨秋或るコースで悪戦苦闘して来たコースをホールアウトした後で振り返って眺めて見た。ティグラウンドに立ってコースを見渡し第一打を打つ前の景色と全く趣が異なるのに気が付いた。我が社の元役員の先輩より聞いた話がある。それは一つの現象をとらえてみても自分の手元からこれが最善の方法と思ってやって来た事が向う側から見ると全く役に立たないことがある。日本の企業が苦しい立場に置かれている現在自分の方からだけ物を見て向う側から変って来ている事が色々な局面で理解出来る事に時々遭遇する。手元から見、また向こう側から物を見て来ることが大切である。

## 年の初めに想う

牧 角 淳 (旭化成富士支社)



新年おめでとうございます。年月の過ぎるのは早いもので富士市に来てはや26年になろうとしている。名峰富士山の真正面にある此の地では、どの地点からでも晴れている限り、秀麗な富士山を眺める事が出来る。当工場の玄関を一步出ると雄大な富士の姿が目前にあり、朝夕希望と安らぎを与えてくれる様に思える。春になると裾野には霞がかかり、覆われた頂を見せているその姿は、1年中で一番女性的で美しい。夏になれば雪はすっかり消え群青色の山肌を現わすが、以外と男性的ですっきりしたものである。山の南面にあたる此の東海道路筋からの富士山は実に端麗で壮大であり毎日眺めていても飽きないものであるが、殊に町の西を流れる富士川の鉄橋から見る富士山は最高で、端然としていささかの隙もなく東に愛鷹の山々を従え西に思いきり裾をひいたその山容は自信に満ち満ちて、見る人にゆるぎない信頼感を与えてくれる。しかし此の名峰も眺める場所によっていろいろと趣きを変え印象も変るものである。道路が整備されているので4～5時間を要すれば山麓を一周する事も出来、南北両面から五合目迄、車で登る事も可能である。山麓は広大で起伏に富みあふれる緑の懐を広げて我々を迎えてく

れる。南面にある表富士周遊道路は富士宮から御殿場まで約1時間の道のりで、日本有数の高所にある道路と聞くが走っている間も降りてみても少しもそれを感じる事がない。西南朝霧高原から望むと、山裾は美しい起伏の連続でまるで外国の絵葉書を見る様な美しさであるが目を上げて山を眺める時、富士はその頂からパツクリと縦にさけて石塊や土砂が落下しているのが見え愕然とするが、これが大沢崩れと云われ富士山の一番の泣き所であり醜い場所である。正面の美しさしか知らぬ人には意外に凄絶な眺めであろう。北面の富士は厳しい。南面に春が訪れ雪が溶け花が咲いても、北面の富士はまだ厚い雪に覆われ寒々としている。東に廻ると太陽の光は明るくなり、穏やかな起伏に富んで開けるが、見上げる山腹には宝永山の大穴がぽっかりと口をあけ、古い傷跡の様にも見え又いつかここから火を吹くのではないかとさえ思わしめる。遠くから眺める富士山は、実に雄大・壮麗で近より難い美しさの山であるが、近づいてみると病を持ち古傷も持ち山頂の厳しさの反面、麓は親しく人間を受け入れてくれる意外と人間的な山である。近くでのみ見る人はこの雄大さを知らず、遠くでのみ見る人はこの親しさを知らないのではないだろうか。富士山だけでなくおよそ何事においてもそうであるかも知れない。幼少の頃から慈み育ててもらった両親にでもその時点においては、まるで空気のようにその愛を当然の事として過したが、今遠く別れて初めて有難さと偉大さを感じるものである。長い年月会社に働いて多くの人に会い別れて来たが、遠く離れてみてあらためてその暖さ・懐かしさを思い、いつまでも印象に残るのを覚える事があるが、富士山によく似ていると思う。願わくばその様な人間になりたいものと、この山を見るとよく思う事がある。朝日に輝く富士、1年中この雄大な名山を眺めて働ける事は幸せであり、又この名山は我々人間共に多くの事を考えさせてくれる。毎日仕事に追われて、つい周囲の事に目を向ける余裕を失いがちであるが、たまには自然を眺めてのんびりと物を考えてみる事も、頭の中の機能を若返らせるのではないだろうか。こういう時間を持つ事が、昨日を顧み、明日への希望をわかせてくれる活力にもなり、人間長生きする為にも必要な事ではないかと思う。

## 学会研究活動

### 第35回職場精神衛生研究会

61年9月4日、大同特殊鋼本社にて開催。

話題提供 職場不適應のケースに当つて

東海銀行診療所保健婦 伊藤光世先生

アルコール依存症の対応

N T T名古屋中央健康管理所看護婦 高野安子先生

事例研究を中心に前回に引き続いて両先生から話題を頂いた。伊藤先生から、胃腸不調と職場人間関係を主訴とした女性のフォローアップの事例を、カウンセラーによる心理療法を中心に診療所で経過をみたケースの報告があった。

飯田先生(東海銀行)から銀行組織の中で、診療体系と、カウンセラー体系が独立し、これの調整に当る産業医の苦勞の話題を展開した。

高野先生から、昨年4月から民営化され新しく発足したN T Tが、公社から民間企業に脱皮し、厳しさを増して来た変化の中にあつてアルコール依存症の職場復帰の事例が紹介された。

メンタルヘルスに対する関心は年々高くなり本研究会への参加者も回を追うに従って増え参加者は50名に達し、意見、討論も活発に展開され、参加者がそれぞれもつ問題を話題の中でうまく理解されている様である。世話人祖父江逸郎先生はしばらく各企業の中から話題を頂いて事例研究を進めてゆきたいと今後の進め方について語っておられた。

森川利彦(三菱電機名古屋)

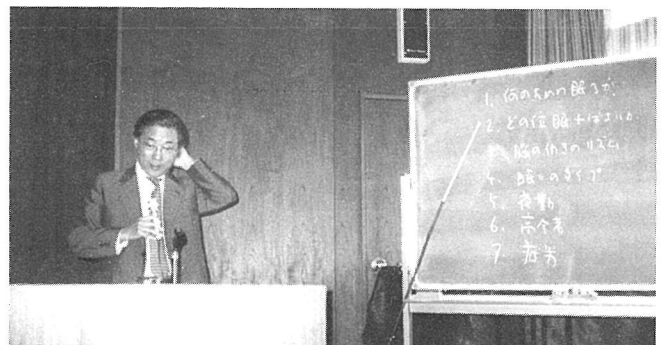
### 第4回作業負担研究会

第4回作業負担研究会は10月23日(木)に名古屋大学医学部の鶴友会館において開催された。

今回は精神負担を取り上げ、脳波をテーマに2人の先生に御講演頂いた。今回のテーマは産業衛生的には馴染み薄いテーマであり、参加者もいつもより少く、30名程度であったが、17時まで活発な議論が行われた。

最初に東邦大学医学部生理学教授の鳥居鎮夫先生が「ストレスと脳波」と題して講演された。睡眠脳波の研究家であることから睡眠時間や夜勤の問題に言及され、睡眠時間は5時間で充分で、足りなければ代償的に睡眠をとるものであるといわれた。最近の研究の中からは脳波のCNVという指標が注意集中を現わす指標であり、今後の研究によっては精神負担の評価にも活用できるのではないかと結ばれた。

次に豊田中央研究所次長の久野皓先生がMEの立場から「脳波の自動解析からみた作業負担」と題して講演された。従来、医師が限で行っていた脳波診断を自動解析し、脳波マップシステムにより、定量化した円グラフで、計算作業などの例をとって説明された。



また作業中の脳波を測定するための電極一体型アンプの開発状況にも触れられ、脳波測定の簡便さにより、色々の作業の脳波をとることも可能になるであろうと結ばれた。

精神負担の評価に脳波が利用できないかと2人の専門家に話をして頂いたが、生理学的にも技術的にも困難な問題が多い。

今後の研究により、精神的ストレスという化物みたいな言葉に一筋の光を当てることになればと期待している。

入谷辰男(トヨタ自動車)

### 職業性アレルギー研究会特別企画

9月13日(土)の午後、名古屋駅前の国際サロンで「アレルギー疾患の診断・治療の進歩」をテーマとして開催された。「職業性」にこだわらず最新の考え方を勉強するという、世話人の島先生の趣旨に呼応して医師会の先生方も含めた216名の参加をえて、その熱気の中、会は進行した。各分野で日本を代表する先生方の講演は、参加者の期待に十分答えるものであった。内容は以下の通り。



(1) アレルギー性接触皮膚炎の臨床：吉川邦彦（大阪大学教授）

(2) 花粉症の診断と治療：奥田 稔（日本医科大学教授）

(3) 間質性肺疾患の診断と治療：泉 孝英（京都大学助教授）

(4) 気管支喘息と気道過敏性：宮本昭正（東京大学教授）  
特に“気管支肺胞洗浄の診断的意義はそれほど高くない”“無症状のサルコイドーシスに対するステロイド治療は有害”“もっと職業病に対する研究を臨床家がやるべき”等、泉先生の率直な話は印象的であった。

加藤 保 夫（保健衛生大学）



## 日本石綿シンポジウム

昭和61年11月17日、名大鶴友会館において「日本石綿シンポジウム」（世話人代表 島正吾）が斯界の専門家 130名の参加の下に開催された。この会では、特別講演として、マウントサイナイの鈴木康之亮先生のお話があった。

私は、かつて先生に組織学の講義をうけ、その中で石綿繊維に串ざしにされたマクロファージの写真をみせていただいたことがある。先生は、現在の米国における石綿研究の現況と問題点について昔と変わらぬ柔和な物ごしで話をすすめられた。このほか、建設労働者のかかえている石綿暴露の現況をはじめ、現在もっともホットな石綿問題の解決について具体的な討議がなされた。日本の石綿研究者によるこのような会がぜひまた近く開催されることが期待された。

吉 田 勉（保健衛生大学）

## 第41回日本産業医協議会

第41回日本産業医協議会は10月14日神奈川県民ホールで開催され、主題「明日への産業医の方向を探る」にふさわしく特別講演2題（坂部弘之；産業医学発展の多面性、小此木啓吾；現代社会におけるこのころの変容）とパネルディスカッション「労働時間一ゆとりある生活を築くために」でまさに時宜にかなったものであった。

坂部先生は、ストレス対応のサポートシステムとして日本独特の会社組織の役割を評価し又、これからの産業医学は従来の平均的労働者としての対応に加えて、個々の労働者への配慮を一層強めるために臨床医学の産業医学的發展に期待するところが大きいことを強調された。小此木先生は、ライフスタイルの変化や情報社会とこのころの変容、条件・状況に応じてフレキシブルに生きられるような人生観や新人類的な・五の関係と中高年のストレスなど今日的話題を興味深く話された。パネルも三浦豊彦座長の巧みなりードで各演者（労働時間問題研究者、労組、経営者、労働衛生研究者、産業医）の立場が浮き彫りにされ充実した内容で、特にある演者が言った労働の哲学、労働の文化人類学という言葉が印象に残った。

清 水 善 男（三菱電機静岡）

## 昭和61年度全国労働安全衛生大会

去る10月15～17日にかけて、全国産業安全衛生大会が、横浜市において、開催されました。16日SHP集会でのシンポジウム「健康と食行動」は、従来と違い、食事の食べ方、食べさせ方についての討論であり、生活リズムに合わせた摂取タイミングの良否によって栄養がつきすぎたりとおもしろい内容でした。職場の担当者からの、一週間で、昼夜逆転する交替勤務者の場合、いつ食事するのがよいかとの切実な質問に対して、体が適応するのに5～7日位かかり、その場合、考えようがないとの苦しい答弁もあり、現場の実状を伺える一幕もありました。現代の生活では、このリズムの乱れによる栄養上のトラブルも多くなっています。又、元NHKアナウンサーの川上氏の講演「心とことば」は、ストレス時代において、日本人が不得手とする言葉が、いかに重要であるかを気づかせてくれる楽しい、すてきな講演会でした。以上、本集会の内容は、今回、私達が発表できた単身赴任者の問題を考えた時も、生活のリズムの乱れ、ストレスの問題など共鳴できる点が多くありました。

稲 垣 通 子（国鉄静岡鉄道健診センター）

## 第7回作業環境測定研究発表会

去る11月26日、27日の2日間にわたり、東京の後楽園会館において開催された。演題は19件、2日目午後から「有機溶剤の測定をめぐって」と題してシンポジウムが開かれた。参加者は250名であった。

演題の内容は、分析方法に関するものが多かった。たとえば、分析方法のちがいに値がばらつく遊離けい酸、分析時間のかかりすぎるコールタール・オイルミスト、今後問題になってくるであろうゼロソルブ類の分析等について検討された。また、測定の合理化という面でも検討が加えられていた。たとえば、事務の合理化のためにワープロの拡張機能を利用したもの、有機溶剤のガスクロマトグラフ法の自動分析や連続測定装置の開発といったものがあげられる。

シンポのテーマは重要なことであるが、ややマンネリ化した感があった。

浅 野 正 秀（豊田健康管理クリニック）

## 日本労働衛生工学会第26回学会

去る11月28日、29日の2日間、作業環境測定研究発表会に引き続き東京の後楽園会館で開催された。参加者250名。1日目はシンポジウム「作業環境管理における工学的対策の現状」で5人の演者から講演があった。2日目は、会場を2つに分けて計37演題が発表された。

シンポジウムの演者は、集じん装置メーカー・塗料メーカー・自動車メーカー・作業環境測定士に加えて大学関係者が一人であり、学会というより実用又は応用研究会という印象を受けた。こうした分野では、当然の流れなのであろう。一般演題は、測定機器・保護具に関するものや分析手法に関するものが多かった。工学的環境改善というイメージを持っていた私にとっては、環境改善事例がわずか2件しか発表されなかったのが、少し物足りなかった。

柏 木 時 彦（柏木労働安全衛生コンサルタント事務所）

## ● 会員の訃報 ●

- 昭和61年8月27日 桑原 邦利先生 56歳 (桑原内科医院)
- 昭和61年10月2日 横山 恒矢先生 72歳 (大同病院顧問)
- 昭和61年10月20日 大谷 誠二先生 76歳  
(東レ名古屋事業場健康管理室長)
- 昭和61年10月22日 宮田 昭吾先生 56歳  
(岐阜大学医学部衛生学教室教授)

## 横山恒矢先生の思いで



皿 井 進 (大同病院)

昭和48年7月中央労働災害防止協会の最高幹部から中部安全衛生サービスセンター創立に当たり私に適当な人を紹介してくれとのご依頼があった。

私は直ちに名鉄病院阿久津院長にお願いに参り

故 横山恒矢先生 内科医長兼健康管理科部長の横山先生を割愛して戴きました。先生は、以前から交通関係乗務員のストレスと健康をテーマとして研究され、それを健康管理の実践に生かして居られた私の理想とする産業医であったため、中央労働災害防止協会も非常に喜んでくれました。その後の先生のセンターにおけるご活躍は皆様のご存じのとおりです。ただし、先生も昭和60年9月定年になられたので、大同病院の衛生部を小森先生と一緒に盛り返して戴くため、再び無理なお願いをしたところ、快く顧問としてご就任戴きました。そして、大同関係および東洋レーヨンの産業医として、また、成人病検診、外来人間ドックなど華々しくご活躍願ひ大変各関係者に喜ばれました。

ところで、ご逝去の2日前、小森先生と3人でこれからの産業衛生健康管理などについて、親しく討論しました時の先生の高邁なご意見ご態度などが今でも時々思い出されてなりません。ただひとつ、ご夫人のお話によりますと、当日朝、奥様が新聞を寝室に持参され、その後お勝手にご用をしておられ、何気無く寝室に行かれましたところ、新聞をお読みになりながら静かにあの世に行かれていたとお話を聞かされ、何とも言いようのない感情が私の胸に湧いて参ります。

横山先生とお付き合いをして戴いた多数の皆様方、先生のご逝去をどんな風にお感じになっておられますでしょうか。

## 大谷先生のおもいで

袴 田 章 二 (東レ三島)

本年5月、大谷先生の退社のご挨拶をいただいたのも東の間、今回



故 大谷誠二先生

訃報に接してあらためて別離の感概が深い。

先生との心の附合は、第二次オイルショック後不況のさなか、御殿場で行なわれた産業医相互研修会に出席された先生に、私の迷いごとを相談したところ、「人生どこに行ってもそんなに甘くないよ、東レはあったかい所だから残るのも選択の一つだよ」といわれ、やむを得ずポケットウイスキーを取出した。

私の産業医としての出発はこの時からであります。以後、地方会、全国大会にお供をした。

前立腺手術後、歩行に不自由がみられ、徳島の学会で、安全地帯のない横断歩道を横断中、シグナルが赤くなり右折車がつつこんで来るのでガードした。そのお礼といい、その晩痛飲した。翌朝お会いしたところ、先生は宿泊したホテルの名前を失念し、タクシーで徳島中のホテルをさがし、東京でなくてよかったといわれた。以後私もホテルのレシートをポケットに入れて外出している。

先生は、東レ在職37年の偉大な足跡を私に示して亡くなられた。ご冥福をいのる。

## 宮田昭吾先生追悼記

牧 野 茂 徳 (岐阜大衛生)



故 宮田昭吾先生

岐阜大学教授宮田昭吾先生は、昭和61年10月22日逝去されました。死因は心筋梗塞、享年56歳でした。

先生は昭和44年6月岐阜大学医学部衛生学教室の教授として着任され、まず地域保健の研究に着手されました。岐阜県東白川村をフィールドとして、この10数年間活動を継続してこられました。

その成果は学会において高い評価を受けています。

また、先生は日本衛生学会などの各種の学会の評議員を歴任されました。そして、労働衛生指導医として地域における労働衛生の向上に大いに尽力され、緑十字賞などを受賞されました。昨年11月岐阜市で開催された日本産業衛生学会東海地方会の学会長を務められることになっておりました。また、岐阜県保健医療対策協議会委員などの各種委員会の委員を歴任され、学識経験者として岐阜県の衛生行政にも多大な貢献をされました。

教室にあつては私ども教室員の個々を尊重し、よりよい研究の場を与えていただきました。先生のご冥福をお祈り申し上げます。

## —— 東海地方会次期新役員決まる ——

次期(昭和62~64年任期)の本部役員(地方会理事を兼ねる)並びに地方会会長の選挙が61年10月に実施された。投票は10月20日に締め切れ、10月28日に大同特殊鋼本社6階の会議室にて開票が実施された。有権者総数は311(本年7月31日までに本部会費の納入が完了しているもの)であり、有効投票は235票(投票率75.6%)であり、前回の70%と比較して高率であり、選挙への関心は高いことが窺われた。

その結果、地方会会長には島 正吾現会長が再選され、また本部理事には井上 俊、皿井 進、島 正吾、錫村 満、吉川 博の各氏が当選された。また本部評議員(各県ごとに選出、愛知43名、静岡7名、三重6名、岐阜6名)として以下の方々(敬称略)が選出された。

(愛知) 青山光子、飯田英男、出原 汎、伊藤英夫、伊藤宜則、伊藤 圓、入谷辰男、岩井 淳、大谷元彦、大島秀彦、大野良之、小篠 築、小野雄一郎、柏木正雄、柏木時彦、加藤昌平、加藤竹男、加藤保夫、栗田秀樹、小林章雄、小森義隆、近藤正人、五藤雅博、榊原久孝、佐久嶋順平、杉山龍三、鈴木良一、祖父江逸郎、竹田鑽一、竹内康浩、立川壮一、久永直見、福井久雄、松本光雄、松本忠雄、三谷一憲、森川利彦、

|                                         |                            |
|-----------------------------------------|----------------------------|
| 山田和生、山本正彦、山田信也、吉野貞尚、吉田 勉、鷲野昌夫           | [投票率 75.8%]                |
| (静岡) 井上 潔、鎌田 隆、後藤 猛、斎藤俊二、清水善男、袴田章二、牧角 淳 | [投票率 58.8%]                |
| (三重) 石川 昭、坂本 弘、滝川 寛、中尾一吉、橋本哲明、平井 智      | [投票率 93.1%]                |
| (岐阜) 井田龍三、岩田弘敏、加納達夫、河合 信、花井喜一郎、森 厚      | [投票率 72.4%] (選挙管理委員長 森川利彦) |

## Q & A

Q 日本産業衛生学会から勧告されている許容濃度について、その根拠はどこに求められているのかお教え下さい。

A 許容濃度は、労働者が有害物質にばく露される場合に、当該物質の空气中濃度がこの値以下であれば、ほとんどすべての労働者に健康上の悪い影響がみられないと判断される濃度と定義されています。しかし、人の有害物質への感受性は個人ごとに異なるので、この値以下でも、不快・既存の健康異常の悪化、あるいは職業病の発生を防止できない場合もあることが付け加えられています。ご質問の許容濃度の根拠は、物質によって異なっているので根拠を知っておくことは重要です。たとえば最近2年間に新設または改訂された物質のいくつかについて、その根拠となった生体反応をみると以下のとおりです。

- ◎セロソルブ類4種：動物の精巣萎縮作用
- ◎ガソリン：含有されるベンゼンとヘキサンの許容濃度から換算
- ◎n-ヘキサン：ヒトと動物の末梢神経障害
- ◎マンガン：ヒトの注意集中力低下、記憶力低下など
- ◎塩化メチル：ヒトの慢性的神経系症状
- ◎1,4-ジオキサン：動物に催腫瘍性を認めぬ濃度の10分の1
- ◎ジクロロメタン：血中CO-Hb濃度10%以下にすること、労働時の運動負荷増を考慮

それぞれの物質について、そのあたりを詳しくお知りになりたければ、許容濃度の改訂・新設の都度、その根拠である提案理由が、産業医学に公示されていますのでそちらをご覧ください。

なお、石油化学工業協会産業衛生委員会で、全項目の許容濃度の提案理由を集大成し小冊子としてまとめております。ご希望の向きには実費頒布しているそうですので、下記までお問合せ下さい。

日本産業衛生学会許容濃度提案理由書 (一冊1500円)  
お問合せ 石油化学工業協会 技術部 TEL03-501-2151  
〒100 東京都千代田区幸町2丁目1番1号 飯野ビル (K)

## 会員の消息

(61年7月24日～61年12月10日)

新入会員 12名

(愛知) 山本正彦 (名古屋市立大・医・内科)、岩田重信 (保健衛生大・医・耳鼻科)、市川朝洋 (光生会病院)、広瀬輝彦 (オリエンタルクリニック)、老月喜義 (東洋メディカル)、林 正人 (みなと生協当知診療所)

(静岡) 野原秋子 (聖隷健診センター)、柴田磐夫 (聖隷健診センター)  
加藤 力 (聖隷健診センター)

(三重) 林 友信 (津生協病院)、村田真理子 (三重大・医・衛生)、松村康弘 (三重大・医・衛生)

転入会員 2名

(愛知) 黒坂 真 (石川より)、(静岡) 長瀬十一太 (京都より)

転出会員 2名

(愛知) 宮本慶子 (東京へ)、杉山恭子 (鳥取へ)

退会会員 4名

(愛知) 林 正人、松本朝栄、古橋佳治、本部たけ

## —— 会員の表彰 ——

昭和61年度 労働大臣功績賞

橋本 哲明 (東芝三重)

## 地方会理事会

- 第3回理事会 9月16日(火) 大同特殊鋼本社 出席22名
- A. 報告事項 本部及び事務局からの連絡事項 (吉川、坂本)  
地方会関連研究会等の報告事項 (立川、森川、島)  
東海地方会誌 (60年度年報) の発刊 (森川)  
地方会ニュース (第7号) 発刊について (森川)
- B. 協議事項 昭和60年度東海地方会学会について (宮田)  
第4回作業負担研究会について (入谷)  
役員選挙について (森川)  
地方会ニュース (第8号) 発刊について (森川)
- 第4回理事会 11月11日(火) 大同特殊鋼本社 出席23名
- A. 報告事項 本部及び事務局からの連絡事項 (島、立川)  
地方会関連研究会等の報告事項 (立川、入谷)  
役員選挙結果について (森川)
- B. 協議事項 昭和60年度東海地方会学会について (牧野)  
地方会ニュース (第8号) 発刊について (岩井)  
「産業医、産業保健婦、産業看護婦、衛生管理担当者のための研修会」について (岩井)  
地方会関連研究会等について (島)

## これからの諸行事予定

- 第3回 産業医、産業保健婦、産業看護婦および衛生管理担当者のための研修会  
期日 昭和62年3月6日(金) 10:00～16:00  
場所 名古屋ターミナルホテル 8F 福寿の間  
講演 「健康管理における検査値の見方、考え方」  
牧野秀夫 (保健衛生大学衛生学部)  
講演 「突然死をめぐって」 山田和生 (名鉄病院)  
講演 「作業負担と健康への影響」 入谷辰男 (トヨタ自動車)
- 第60回日本産業衛生学会・第42回日本産業医協議会  
期日 昭和61年4月7日(火)～4月10日(金)  
場所 国立教育会館 学会長 小泉 明
- 第57回日本衛生学会総会  
期日 昭和61年4月6日(月)～4月8日(水)  
場所 国立教育会館 学会長 菊池正一
- 第6回作業環境測定研修会  
期日 昭和61年3月7日(土) 13:00～17:00  
場所 産業貿易会館本館3階 国際会議室  
テーマ 「健康管理と作業環境管理の接点」  
特別講演 島 正吾 (保健衛生大学医学部公衆衛生)

(財)愛知健康増進財団健康管理センター

(社)名北労働基準協会

会長 田中 精一

〒462 名古屋市北区清水一丁目19番13号 ☎052(962)3091

社団法人

オリエンタル労働衛生協会

会長 鈴木 正雄

名古屋市千種区今池一丁目8番4号

労働大臣認可 企業外総合健康管理機関

財団法人 近畿健康管理センター

三重事業部

〒514 三重県津市神戸65  
TEL (0592) 25-7426(代)

中小企業共同安全衛生改善事業 労働省名簿登録機関  
健康診断1-23-06号 作業環境測定2-23-11号

財団法人 公衆保健協会

〒453 名古屋市中村区二ツ橋町4-4  
☎(052)481-2161

(財)東海検診センター

理事長 宮崎 勤治  
診療所長 齋藤 俊二

〒410 沼津市寿町11番22号 ☎0559(22)1157

東亜合成化学工業(株)名古屋工場

名古屋分析センター

取締役工場長 藤倉 三郎

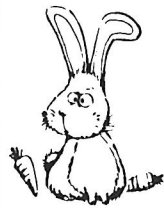
〒455 名古屋市港区昭和町17番地23 ☎052-611-6611

作業環境測定静岡労働基準局第22-6号  
計量証明事業静岡県登録第128号

株式会社 富士電化環境センター

静岡県湖西市鷺津600番地の2 ☎(05357)6-1713・0841

謹賀新年 昭和六十二年元旦



(医) 曙会

美合病院 産業医学研究所

理事長 神取 武史

〒444 岡崎市美合町字平端24番地 ☎(0564)51-2521

(社)日本作業環境測定協会 正会員

(社)日本環境測定分析協会 正会員

作業環境測定機関第23-19

株式会社 環境公害センター

代表取締役社長 山田 光彦

〒462 名古屋市北区長田町1丁目11番地 ☎(052)914-4837(代)

社団法人岐阜県労働基準協会連合会  
労働衛生センター

会長 矢橋 浩吉

〒501-61 岐阜市日置江4丁目47番地 ☎(0582)79-3399(代)

作業環境測定機関

(株)中京環境技術センター

代表取締役 森 培根

〒457 名古屋市南区丹後通り2丁目1番地 ☎052-614-2173

(有)東海分析化学研究所

代表取締役 大場 和子

〒441-03 愛知県宝飯郡御津町大字赤根字下川50  
電話 (05337) 5-2250番(代)

試験室のレイアウト・環境測定分析のご相談は当社へ  
理化学機器総合商社

富士通産 株式会社

本社 名古屋市熱田区横田二丁目1番1号 ☎(052)681-1726(代)

FAX (052)671-0919

営業所 豊橋市八通町73番地 ☎(0532)31-8711

理化学部門  
理・工業機器・医療機器・試  
薬・工業薬品・洗剤・廃水  
処理装置・計量器・計測器  
・包装資材・指示器  
環境測定分析部門  
作業環境測定・水質・大気  
その他

作業環境測定

環境測定分析  
環境調査・アセスメント  
品質管理分析

株式会社 三重環境技術センター

〒510 三重県四日市市大治田3丁目3番17号

TEL (0593) 46-7511(代) FAX (0593) 46-8934

編集後記

10年後の1996年は誰かの予言が当たるとするならば、地球は滅亡、吾々は存在しなくなる。しかし、日本は永遠に発展し繁栄するという前提で10年後の産業はどのように変わり、産業医の位置付けはと、悲観論と楽観論が交錯した編集委員各位の意見だった。各産業で、永年企業内で活躍しておられる先生方のご見解を伺うことが出来た。常に10年先をみる先見性をもって対処することが、エクセレント・カンパニーの条件であるといわれる。私共も、こうした先見性を常に心がけるようにしたいものだ。

横山、大谷、宮田の諸先生がなくなった。何回もニュースに玉稿を頂き、地方会発展に寄与された友をなくした淋しさは耐えき

れない。心からご冥福を祈りたい。

(森川 利彦)

次回発行 昭和62年5月1日予定

編集責任者 岩井 淳(三菱名古屋病院)

編集委員(五十音順)

柏木時彦(柏木労働安全衛生コンサルタント)

加藤保夫(藤田学園保健衛生大学)

小森義隆(大同病院)

竹内康浩(名古屋大学)

久永直見(名古屋大学)

森川利彦(三菱電機名古屋)